



第110号  
北海道教育大学  
青陵会

(北海道教育大学岩見沢校同窓会)

会長 早瀬 公平

印刷 北海道社会福祉事業団福祉村  
(TEL 0126-45-2300)



〈題字は岩教大、藤根信章元教授の揮毫によるものです〉

- も ○巻頭言…… 1      ○総会報告…… 2      ○令和4年度役員…… 3
- く ○研修活動内容の報告…… 4      ○先輩を訪ねて…… 5      ○学生活動支援事業…… 5
- じ ○恩師と学生のこの頃…… 6      ○新青陵会員の抱負…… 7      ○支部便り…… 8

これらについては、「同窓会今後のあ

一つは、同窓会改革であります。一つは、同窓会今後のあ

援会（PTA）の三者で実行委員会

わが母校は、一九二二（大正二二）年に実業補習学校教員養成所として開校し、それが一年課程であったことから、百年を経過した今日、大学と同窓会が同時に百年の節目を迎えるということ、大学、同窓会、後援会（PTA）の三者で実行委員会

上げます。

心からお祈り申し上げます。

百周年行事に関して、ホームページにて  
随時お知らせしますのでご覧ください。  
<http://www.seiryokai.net>



### 「大学・同窓会の創立百年を祝う」

北海道教育大学青陵会 会長 早瀬 公平



「先行き不透明な時代を迎え…」とは二〇年ほど前に論文の書き出しとしてよく使われたフレーズですが、今、まさに、新型コロナウイルスやロシア・ウクライナの問題など、予期せぬ大きな問題が次々に出現しています。

先日、道内の高校適正配置について道教委から計画案が公表されましたが、岩見沢東西の高校が統合し、校舎は西高を活用すること、まさかとは言え、今まさにそういう時代を迎えているのです。

世間はあまりにも騒がしく、学校現場では学力向上に加えて地球温暖化、SDGsやGIGAスクールなど、しつかり腰を据えて取り組みたいところですが、課題が多すぎて大変難しい時代を迎えていることと思います。

さて、道青陵としてもいよいよ大きな二つの事業を完遂しなければなりません。

一つは、同窓会改革であります。

これらについては、「同窓会今後のあ

り方検討委員会」の答申を踏まえ、多くの議論を経て、ほぼ素案は固まりました。また、役員会の段階ですが、今年度中には皆様方にお示しできると思います。その際には、どうぞ、忌憚のないご意見をお願いしたいと思えます。その後、総会の審議を経て、令和五年又は六年には新しい青陵会へと移行したいと考えています。

二つ目は、来年、九月二十三日（第三土曜日）に、道青陵創立百周年記念式典を開催することとなりました。これまで、七〇周年、八〇周年、九〇周年と行われてきた記憶があります。今年度は大学創立百周年と重ねて記念の節目を祝うというものです。

わが母校は、一九二二（大正二二）年に実業補習学校教員養成所として開校し、それが一年課程であったことから、百年を経過した今日、大学と同窓会が同時に百年の節目を迎えるということ、大学、同窓会、後援会（PTA）の三者で実行委員会

を組織して祝賀行事に取り組みものであります。過日、準備委員会から実施の段階に入っております。

詳細については漸次お知らせすることになりますが、会員の皆様には多数ご参加いただきますようお願いとご案内を申し上げます。

今日、コロナ禍により、会議や懇親会など、自粛を余儀なくされたことにより、活動が停滞している感がしますが、ぜひ新しい生活の創造と新しい様式を遵守して、皆様方との交流を深めながらこの二つの事業の成功を目指してまいりたいと思えます。

どうぞご理解とご協力、そして今までにないことに對する斬新なアイデアを賜りたいと心からお願いを申し上げます。

百周年行事に関して、ホームページにて  
随時お知らせしますのでご覧ください。  
<http://www.seiryokai.net>



令和四年度 北海道教育大学青陵会総会報告

「母校も同窓会も創立百周年の節目を迎えて」

北海道教育大学青陵会理事長 藤田 祐二

一 はじめに

昨年度に引き続き理事長を務めさせていただきました藤田祐二と申します。本年度も与えられた役割を果たしてまいりたいと考えておりますので、各会員の皆様には、一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

さて、令和四年度総会については、

五月二十一（土）に岩見沢市のホテルサンプラザで開催する予定としておりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、一昨年度、昨年度同様、集合形式の総会を中止することとし、各支部への議案の送付による提案、並びに各支部からの議決書の送付により議決を行い、総会議案は各支部の可決により承認されました。

この間、一般の会員の皆様からのご意見を伺う機会がなく、大変申し訳なく存じますが、このような状況ですので、何とぞご理解くださいますようお願い申し上げます。

二 令和三年度の反省

① 事務局

ア 同窓会創立百周年に向けた準備（大学との連携による準備委員会の開催、期別名簿の作成など）

イ 「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた会則の見直し等に向けた検討など

ウ ホームページの更新による積極的な情報発信

エ 総務部

ア 退職会員の意識の変容に向けた啓発

イ 大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

ウ 総会と研究大会の同時開催（新型コロナウイルスにより中止）

エ 研修誌「望岳Final」の頒布

イ 会員・組織部

ア 期別同窓会員名簿の作成に係る方針の確定及び各支部との連携によるデータの集約

イ 研修誌「望岳Final」の頒布

ウ 期別同窓会入会促進

エ 学生会活動支援事業の推進

イ 学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

ア 広報・情報発信部

ウ 会報「道青陵」一〇八号、一〇九号の発行

エ ホームページの改善と充実

イ 大学連携部

ア 学生活動支援事業の推進

イ 学生会活動の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

以上が令和三年度の主な取組です。

三 令和四年度の活動計画

① 事務局

ア 大学及び同窓会の「創立百周年を祝う会」に向けた取組（大学との連携による実行委員会）の開催、推進計画の策定など

イ 「同窓会今後の在り方検討委員会答申」を踏まえた取組の継続検討

ウ ホームページでの積極的な情報発信

エ 総務部

ア 退職された会員への会報の送付

イ 大学の卒業式・入学式における祝文の送付及び同窓会入会に向けた働きかけの強化

ウ 総会と研究大会の同時開催（新型コロナウイルスにより中止）

エ 研修誌「望岳Final」の継続

イ 会員・組織部

ア 総会と研究大会の同時開催（新型コロナウイルスにより中止）

イ 研修誌「望岳Final」の継続

ウ 期別同窓会入会促進

エ 学生会活動支援事業の推進

イ 学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

ア 広報・情報発信部

ウ 会報「道青陵」一一〇号、一一一号の発行

イ ホームページの充実

ア 大学連携部

頒布

ウ 専門的教育職員育成のための特別研修会の実施

④ 会員・組織部

ア 期別同窓会会員名簿の作成

イ 組織実態調査の検討

⑤ 広報・情報発信部

ア 会報「道青陵」一一〇号、一一一号の発行

イ ホームページの充実

⑥ 大学連携部

ア 学生活動支援事業の継続

イ 学生幹事会の実施と新規卒業生の同窓会入会促進

⑦ 会計

ア 会費納入の働きかけ

イ 経費節減の推進

以上が令和四年度の活動計画です。

新型コロナウイルスの感染拡大が繰り返される中、その状況を見極め、感染拡大防止に努めながら、できることから取組を進めてまいりたいと考えておりますので、引き続き、各会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます、総会の報告とさせていただきます。

なお、同窓会が創立百周年を迎える令和五年は、母校である岩見沢校も創立百周年を迎えることから、記



### 研修内容活動の報告

北海道教育大学青陵会 研修部長 小熊孝一

「3年振りに〇〇を実施」という報道が聞かれるようになってきた昨今ですが、そのような中で研修部は現在、新たな研修の在り方を模索し、令和四年度の活動を始めています。

活動の柱は3つあり、①「会員研修会（Sセミナー）」の実施、②各支部と連携した研修活動の充実、③専門的教育職員（指導主事・社会教育主事）の育成を目指す特別研修会の実施となっております。ウイズコロナという時代状況下での取組をどのように進めていくかが大きな課題であると押さえており、引き続き、研修の在り方や取組の仕方を検討していく必要があると考えております。

昨年度はお陰様で、役員の皆様や各支部の皆様、会員各位のご支援やご協力により、②と③の取組を一定程度進めることができました。関係の皆様には、改めて深く感謝申し上げます。このような時だからこそ、皆様からのご意見やご助言、ご提言が大変ありがたく、その支えが力になりました。

今、①のSセミナーは、どのよう

にその機会を設定するのか、今までにない発想で考えていくことが必要であり、このことは大きな曲がり角にあるものと思います。教員会員が減少している一方で、民間・公務員会員が増加している中、会員の幅広いニーズに応える研修内容を見据えつつ、取組を進めることが大切であると考えています。どの会員にしても、どのような形であれ、「社会」との関わりは今後益々一層深まってくるものと思います。

つまり、「学校」を見つても「社会」に目を向け、「社会」に身を置きつつも地域の核である「学校」も見つけていくような方向性を考えることが、その答えの一つなのかも知れません。引き続き、青陵会の役員はじめ、会員の皆様からのご助言、ご指導をいただきながら、コロナ禍の感染状況や社会の情勢を鑑みながら検討していきたいと考えております。

また、②と③については、皆様からのご依頼や情報提供が貴重となっております。ぜひとも今年度につきましても、講師の派遣依頼や指導主

事・社会教育主事に相応しい人材の情報提供等をお寄せいただければ、幸いに存じます。

部数は残りわずかとなってしましましたが、研修誌「望岳Final」の頒布も行っております。研修部長の小熊までお問い合わせいただければ幸いに存じます。



### 北海道教育大学岩見沢校・北海道教育大学青陵会「創立百周年を祝う会」

総会報告でお知らせしましたとおり、同窓会創立百周年記念事業は、母校である大学と一体となって進めることになりました。現段階で明らかになっていることを報告します。

#### 一 主催者

北海道教育大学岩見沢校・北海道教育大学青陵会「創立百周年を祝う

#### 会 実行委員会

#### 二 行事全体の構成

#### (一) 記念式典

期日：令和五年九月二十三日（土）

会場：岩見沢市民会館 大ホール

#### (二) 祝賀会

期日：記念式典と同日

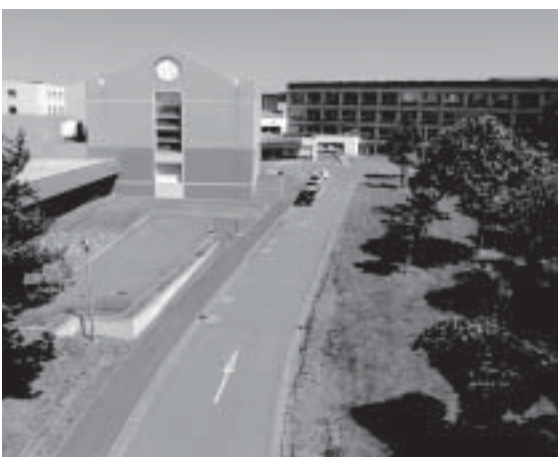
会場：ホテルサンプラザ

#### (三) 記念行事

#### (四) 記念誌の発行

#### (五) 大学への寄付

同窓会九十周年記念事業の取組も参考にして、大学と連携して準備を進めてまいります。今後、各支部を通じて会員の皆様に情報提供してまいりますので、ご協力くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。



昭和六十三年四月一日、赴任の日。稚内到着間近に車内放送で目が覚めた私が車窓から見たのは、期待していた利尻富士ではなく厚い雲に隠れた山陰などが見えない鉛色の空と白波の立つ北の海の景色でした。

赴任地が稚内に決まったときは

「宗谷で骨を埋める」と両親に伝えて札幌を発つたように記憶しています。優柔不断な性格のおかげで、その時々々の状況を比較的抵抗なく受け入れ、何とかやってけることができました。あれから三十四年。本当に宗谷で骨を埋めることになりました。この間、札幌に戻りたいという気持ちがなかつたわけではありませんが、いつしか宗谷で教師を続けるという気持ちが勝つていったのは、宗谷の「合意運動」と稚内市の「子育て運動」があつたからだと思えます。

当時は教員になつたら組合に入るのは当たり前という時代でしたので、訳もわからず組合に入り、先輩の先生の言うとおりの活動をしていました。でも、子どものために一致できたことは管理職や教育委員会とも一緒になつて取り組むという行動理念はと

ても共感できるものでした。教頭になるときも組合の全道会議で自信を持って報告することができました。

「地域の子どもたちは地域で育てる」という稚内市、宗谷は私にとつても住み心地のいい場所でした。

やる気ばかりが空回りした教職一年目は、今で言う学級崩壊状態だつたと思います。

先輩を訪ねて  
～仲間・保護者・地域に育てられて～



北海道教育大学岩見沢校  
小島康秀氏  
(理科・生物研究室 昭和63年卒)

「壊状態だつた」と思いますが、それでも、同僚や先輩、そして何より保護者が私を育ててくれました。親にしてみれば、不満だらけの新米教師だつたと思いますが、わざわざ夕食に呼んでくれたり、飲みに連れて行ってくれたりしてくれ、ただひたすら励ましてくれました。その思いに応えねばという気持ちを持てたおかげで私は少しまともな教師になれたのだと思えます。

なれたのだと思えます。

私は縁あつて宗谷に赴任し、おかげで幸せな教職員生活を送ることができました。「幸せはその人の中にある」と言います。先輩の皆様もそれぞれの職場で働きがいとその幸せを感じられることを心より願っています。

学生活動支援事業

大学連携部長 江幡 佳代

大学連携部では、母校の発展や本学学生による芸術やスポーツ活動を通じた地域貢献活動を支援するため、平成二十二年度から学生活動支援事業を実施し、今年度で十二年目を迎えます。また、幅広い支援を行えるよう、令和元年度から一般申請枠を新設しました。

今年度も、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、学生活動については、見通しが持てないところもあります。現在、学生幹事と連携を取りつつ、可能な範囲で今年度の事業を進めております。ここでは、昨年度の本事業で支援した専攻(団体)の活動の様子をご紹介します。

〈美術文化専攻〉

活動名「修了・卒業制作展」

岩見沢会場と札幌会場で展示会を開催しました。幅広い美術活動や学生の姿勢を見ていただくことで、美術の面白さや楽しさ、可能性を感じていた、大きく貴重な機会となりました。

〈音楽文化専攻〉

活動名「定期演奏会」

昨年度、二年ぶりに岩見沢と札幌で定期演奏会を開催することが出来ました。感染症対策を徹底しながら、盛りだくさんのプログラムで観客に素晴らしい演奏を届けました。

〈音楽文化専攻〉

活動名「いわぶるプロジェクト」

「岩見沢を音楽という側面からより活性化させていきたい」という目的のもと、岩見沢の様々な場所で音楽専攻生などが演奏を行い、その模様を撮影・編集してYouTube上にアップロードするという活動を行っています。今年はさらに柔軟に活動の幅を広げていきたいと考えています。

〈一般枠〉

活動名「北教大岩見沢校YOSA

KO-「迅」

昨年はコロナ禍の影響で、札幌本祭で演舞を披露することができませんでした。今年は、六月の札幌本祭に参加し、市民をはじめ多くの方に感動と元気を与えています。

以上の活動に対し、昨年度、計二十三万円を支援しました。なお、原資は会員の皆様からいただいた基金への寄附で賄っております。会員の皆様のご理解と学生活動支援基金へのご寄附をお願いいたします。



「どんどん挑戦を」  
美術文化専攻  
教授 三橋 純子

山田菜月さんの最初の印象は、学部一年生の授業時に自ら手をあげて「私は学芸員になりたいくてこの大学に来ました！」と明るく言っていたことです。彼女の思いはずっと変わらず、私のゼミに入り大学院にも進みました。興味深かったことは、彼女の学芸員になりたい理由です。

美術史研究を続けたいとか、美術に関わる仕事に就きたい等々のよくあるものではなく、「美術館に来る人々を見るのが大好き」ということでした。そこから「誰でも楽しめる美術館」という研究につながり、卒論や修論でも「ユニバーサル・ミュージアム」がテーマになりました。

特に高校生の時から興味があったという視覚障害を持つ人々の鑑賞活動などは、主要な研究テーマとなり、山田さんは積極的に多くの関連機関の協力を得ながら、複数の美術館において実践研究も継続していきました。大学院在学中に現在勤務している小樽市美術館の正規学芸員に採用されました。休学も挟みつつ、学芸員としての多くの業務を覚えていくと共に、自分の企画展や視覚障害を持つ

方々とのプログラムを実践していき、その成果を修士論文に存分に活かすことができました。

コロナ禍も重なり仕事に忙殺されながらの研究や論文執筆は並大抵の努力ではなかったと思います。修論指導もズームとなり、会える機会も少なくなっていました。同期の壽崎さんと共に、学部から大学院、そして仕事をしながらの修士論文提出まで、常に二人で切磋琢磨しながら、仕事も研究も励まし合いながら進めていたようです。

ゼミでお互いの成長につながる親友を得られたのは、二人にとっての宝物になったと思います。

山田さんは大変陽気でエネルギーッシュで、いるだけで場がパワッと明るくなります。ユニークさも相まって、他の人からは優しくタフな印象がありますが、それゆえに理不尽な思いもけっこうあるようです。

たまに私のことを思い出して相談の電話をくれるのですが、何があってもそれをバネにして自らの糧になる方向への努力に変えていくので、私は心配はあまりせず、久しぶりに色々な話が出来たことが嬉しいと思うことがほとんどです。これからも色々なことにチャレンジしていつまでください。

## 恩師と学生のこの頃



「大切な言葉を胸に」  
学芸員 山田 菜月

高校時代に吹奏楽部だった私は芸術と人が出会える瞬間が好きで、「社会と芸術つなぐ架け橋に」という芸術文化コースの理念に惹かれて岩見沢校に入学しました。

一年生の三橋先生の授業で美術館に訪れた際、美術館は多様な人が集まる場所だと知りました。「どのように人は美術を見ているんだろう」「どんな人が美術館に来ているんだろう」――展示作品と同じくらい、そこにいる人々に興味が沸くようになりました。一つの作品に対して、多様な人が多様な見方をしている美術館は、面白く、興味深い場所だと思えるようになりました。

進路に悩んでいた三年生のとき、卒論指導中に私が「美術館に来る人が好きで、興味がある」と言うと、三橋先生が「そんな人はなかなかいないからその感覚を大切にしたい」と力強く言ってくれました。好きとことが印象に残っています。好きという気持ち、目標が変わった一言でした。私は学芸員になる目標のため、修士課程への進学を決めました。私は今、小樽市の美術館で学芸員として働いています。小さな美術館なので、お客様と直接接する機会が

とても多く、作品の感想や、描かれた題材への思い出を聞ける時間が大好きです。そんなとき、三橋先生が背中を押してくれた言葉は、今の私がかこにいる意味をもらえた言葉、だったなあ、と思います。

どんな学生も温かく包み込み、いつも学生第一で考えてくださる三橋先生の研究室では、沢山の尊敬できる仲間とも出会いました。最近では、研究室の先輩や同級生と一緒に仕事をやる機会にも恵まれ、特に学部、修士と同級生だった壽崎琴音さんとは、研究室でも携わった障害者の芸術活動についての共同研究を進めています。お互いに違うフィールドでアートの携わりながら仕事をしている自慢の同級生です。

私たちに訪れた新しい日常では、今までの常識が通用しないような、答えのない問いに直面することが増えました。一方で、美術をみることで培われるような、他人の考えのよさを認め、創造的に問題を解決していく力は、今後どんなにAIが発達しようとも、人間の大きな強みになると言われています。

美術館という空間の楽しさや面白さを伝え、より多くの人の美術との出会いに寄り添える学芸員になることが今の目標です。これからもお世話になった皆さんに恩返しができるよう、一生懸命頑張りたいと思います。

# 新青陵会員の抱負



いつか、卒業生が集う祭へ。  
株式会社 東急エージェンシー  
藤本 悠平

ねぶたで始まり、最後の最後までねぶただった四年間。藤本悠平といえばねぶたというイメージを持つ方も多いのではないのでしょうか。

二〇二二年三月、岩見沢校美術文  
化専攻を卒業し、現在は東京の広告  
代理店に勤務しています。岩見沢  
という素晴らしい街に四年住んでい  
たせいか、東京での生活は想像以上  
大変で、「北海道に戻りたい」と思い  
ながら日々仕事をしています。現在  
は、広告代理店の中でも特にテレビ  
CMを扱う部署に配属されており、  
北海道で見ることができるといっ  
つかのCMにも私が関わっています。北  
海道を離れても北海道のために仕事  
ができていられることを嬉しく思  
います。

さて、私は昨年、岩見沢ねぶたプ  
ロジェクト実行委員会の実行委員長  
として、岩見沢ねぶた祭の企画運営  
を行い、二十二年ぶりに岩見沢市で  
ねぶた運行を復活させました。この  
実行委員会は二〇一八年、私が大学  
一年生時に同期の有志三十八名で立  
ち上げた団体でした。JR岩見沢駅  
舎内でのねぶた制作や、市内小学校

での出前授業など、コロナと共存し  
ながら地域と関わる活動を行いまし  
た。そして、昨年一〇月、実行委員  
会立ち上げから四年目の年に、市民  
と学生の協力によって岩見沢ねぶた  
祭がついに開催されたのです。

私が卒業してからもこの実行委員  
会は後輩に引き継がれ、二代目実行  
委員長の岩松千紘を中心に、八月二  
十七日と二十八日に二回目となる岩  
見沢ねぶた祭二〇二二が開催されま



撮影／中島聡一朗  
(芸術・スポーツビジネス専攻3年)

した。昨年の約七倍の一万二千名の  
来場者数となり、学生の祭から市民  
みんなの祭へと大きく成長した節目  
の年となりました。

祭には、私を含めた同期の卒業生の  
みならず、二十年以上前に卒業した  
先輩や、卒業後に市役所に勤めてい  
る先輩など、多くの岩見沢校の卒業  
生が参加しました。この祭が、毎年卒  
業生が集まる同窓会のように、そし

て、卒業した後も年に一回は岩見沢  
に来る理由となれるよう、この祭を  
さらに育てていこうと考えています。

東京という離れた場所に住んでい  
るものの、この祭には全力で向き合  
うつもりです。この祭がなくなっ  
てしまつたら私が岩見沢に年一回戻  
る理由が無くなってしまうのです。最  
後になりませんが、皆様と来年の祭  
でお会いできることを楽しみにして  
います。



これまでの  
学びを生かして  
岩見沢市立南小学校  
福田 浩美

三月に北海道教育大学岩見沢校ス  
ポーツ文化専攻を卒業し、四月から岩  
見沢市内の小学校で勤務しています。  
現在は通常学級の副担任、そしてい  
くつかの授業を通して子どもたちと  
関わっています。教員という職業の  
大変さを想像していた何十倍も感じ  
ていますが、その分子どもたちの成  
長していく姿を一番近くで見ること  
ができることにとてもやりがいを感じ  
ています。教員という職業の魅力を感  
じています。この先、学級担任をした  
ときにはもっと素晴らしい経験がで  
きることにとっても楽しみにしてい  
ます。

小学校教員になることは私の中学  
校時代からの夢でした。一度は小学  
校教員ではなく違う道に進むことを  
考えましたが、やはり、子どもに携  
わる仕事がしたい、何かできたとき

に見せる子ども笑顔が見たいとい  
う思いから教師という道に進むこと  
を決めました。

私が通った小学校は複式学級のあ  
るとも小さな学校でした。同級生  
はいなく常に上や下の学年の友達と  
一緒に勉強をしていました。それで  
も小学校時代の思い出が強く残って  
いるのは、6年間がとても楽しい学  
びで溢れていたからだと思います。

学校の中で教科書を使って勉強す  
ることはもちろんでしたが、地域の  
方から学ぶ機会も多くありました。  
様々な場面の中で、できたこと・わ  
かったことの楽しさや喜びを常に実  
感し、6年間を過ごすことができた  
ことは自分の中で、今にもこれから  
にも生きる財産であると思います。

こういった小学校時代の思いから  
小学校教員になるという目標をもち、  
現在子供たちと関わることができて  
いる訳ですが、これまでたくさんの方  
に出逢い、支えてもらった力が今  
に生きています。また、子どもたち  
の成長していく姿を見ることで自分  
も励まされ、毎日の頑張る糧となっ  
ています。教員として自分自身も常  
に学び続けることを忘れずに、教員  
という職業の魅力をこれからさらに  
発見していきたいと思えます。恵ま  
れた環境に満足することなく自分た  
からこそのことに挑戦し、今後も  
精進していきたいと思えます。

# 支部だより



「すべては子どものために」  
高校特別支援大学支部長  
山下 秀樹  
(北海道札幌稲穂高等支援学校)

## 1 はじめに

青陵会高校特別支援大学支部ですが、この新型コロナウイルス感染症の大流行により、ここ三年は他の支部の方々同様に主だった活動が実施できずにいます。

そのため、令和二年度、三年度の定期総会、懇親会の開催はやむを得ず中止とし、書面にて審議、承認を受けての実施となりました。

それぞれの会員の勤務校ではコロナ禍での教育活動において感染予防をしながら少しずつ日常が戻りつつありますが、ここへきてまた感染者が急増するなどまだまだ余談を許さない状況です。

本支部は、主に岩見沢校出身の高校、特別支援学校、大学に勤務する職員及びそのOBで構成されています。それぞれの会員の勤務地も全道を対象としているため、頻繁に参集しての活動が難しい面もあります。

平成十八年度の学部課程の見直しにより、対象となる会員そのものが減少し、そのため本支部の会員も年々減少傾向にあります。

現在、本支部は現役会員とOB会

員併せて四十名程の小さな支部です。職種、学校種や規模の大小、立場の違い等がありますが、同じ大学を卒業した者同士、すべての児童・生徒、学生のために仲間意識を持つて研修等を通して高め合う支部として今後一層の充実を図っていききたいと考えています。

## 2 支部の活動について

### (1) 目的

本会は岩見沢校同窓生として会員相互の親睦を図るとともに、北海道の教育に貢献できる人材としての資質向上に向けて、研鑽を図ることを目的とする。

### (2) 会務

- ・ 会員相互の親睦に関すること
- ・ 会員の資質向上や力量形成のための研修に関すること
- ・ 青陵会本部との連携に関すること
- ・ 母校発展のための協力支援に関すること
- ・ その他目的達成のための必要な事項に関すること

### (3) 今年度の活動予定

- 1月 定期総会・懇親会
- (新型コロナウイルス感染症の状況によっては書面開催)

### 3 おわりに

当面の間、新型コロナウイルス感染症の状況がなかなか落ち着かない中ですので、本会の活動も積極的に

実施できる状況にはなりにくいと考えます。

しかし、各学校ではそうした困難さの中、withコロナ、afterコロナとしてできる取組を模索しています。本支部も同様にいろいろな工夫をしながら、できる範囲で支部の目的を達成できるように活動を引き続き検討していきたいと思えます。本支部や他支部との連携を今以上に深めながら進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

## 瑞宝双光章受章

おめでとうございます

令和三年十一月五日(金)

沖口 廣久様

令和三年二月一日(火)

葛西 明様

藤田 弘司様

令和四年四月二十九日(金)

三輪 勇様

山本 圭彦様

私たちの大先輩である五名の皆様、瑞宝双光章を受章されました。おめでとうございます。ますますのご壮健を祈念申し上げます。

## 編集後記

会報一〇号をお届けいたします。

お忙しい中にもかかわらず、原稿の依頼に対し、ご快諾いただき、玉稿を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

未だ沈静化の兆しが見えない感染症拡大ですが、そのような情勢だからこそ、活動の灯を絶やさぬことが、大切であると信じております。

今後も魅力的な紙面になるよう工夫したいと思っておりますので、良い情報等がありましたら、お寄せいただけますとありがたく存じます。

### 〈広報・情報発信担当〉

・部長 林 宏 和

・副部長 神 島 亘 基

・副部長 洪 谷 憲 一

・副部長 一ノ瀬 健太郎

・副部長 小野寺 秀 樹

・副部長 沢 泰 宏

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広

・副部長 大 山 敏 広